

## (1997年夏号)創成川 ～車との共生～

札幌の街の略図をおおざっぱに手書きするとしよう。まず緑色で大きく十字を描く。東西の緑の線が大通り公園、南北の線は創成川だ。二つの線の交差する所にテレビ塔を入れる。これで略図の基本ができあがる。大通り公園と創成川は、札幌のランドマークとして欠かせない存在なのだ。「創成川ルネサンス」という市民運動が札幌にあって、千人をこえる賛同者がいる。ねらいは「札幌創成の歴史を刻む創成川をよみがえらせ、川べりを市民が憩える水と緑の逍遥地にしよう」というもの。

でもなぜ創成川再生なのか。実際に眺めてみれば理由はすぐにわかる。

札幌はいま短い夏の入口にいる。昼休みや休日、大通り公園の芝生は、すわり込んだり寝そべったりの人で大層なにぎわいだ。トウキビのおこぼれをもらう鳩もまじって、日ざしの中で憩う人の顔が輝いている。冬は雪まつりでにぎわい、ライラック祭り、よさこいソーラン、ピアガーデン、そして年末のイルミネーションと、大通り公園は札幌の屋外ステージの名譽を一身に集めている。

余談だけれど二十年ほど前に、漫画家のサトウサンペイさんを案内して大通り公園を散策したことがあった。その時サトウさんは、「札幌の人は平気で芝生に入り込むんですね」と不思議そうな顔をした。

考えてみると、本州の公園では、多く芝生立入禁止になっている。緑のじゅうたんは眺めるもので座り込むものではない、というのが常識だ。で、僕は答えた。「短い夏はせめて大地の暖かさに直にふれてみたいという気持ちがみんなにあるんです。札幌では昔から芝生に入っています。もし、市役所が立入禁止にでもしたら、次の選挙で市長は落選するんじゃないかな」

サトウさんはあの謹直な表情をふっとゆるめて、「いいですね札幌は」と答えてくれた。

さて創成川。陽の当たる大通り公園に比べるといかに寂しい。川の両側は緑地になっていて散策路もあり、少ないながら水の流れものどかである。それでいて、そこに憩う人の姿はほとんどない。

それもそのはずで、緑地の外側は創成川幹線。札幌の南北を抜ける重要な道路だ。札幌オリンピックの折、一部分を地下車道にしたものの、車の往復数は市内屈指のものだろう。

南一条通りと創成川を結ぶ角に大友亀太郎の像が置かれていて、彼は切株に腰をおろし、遠眼鏡を片手に車を眺めているようだ。背後の大ぶりな柳がこの像に木陰を作ってやっている。動かぬ像だけが憩っている風情だ。

元々創成川はこの大友亀太郎が開削した大友堀が発端。江戸幕府の役人だった大友が旧札幌村元町に二十戸ほどの農家を引率して入植し、将来の水田用の堀として慶応二年に作り上げた。開拓使の札幌開府より三年も前だ。開拓使はこの堀を、物資運搬の運河として利用し、主な役所も工場もこの堀の両側の間に建造した。札幌の歴史は創成川から始まったと言ってもよい。

そんな昔は別としても、創成川はかつて市民のものだった。スケート遊びの場所でもあった。冬に張りつめた氷を伐り出しておいて夏に使う事業がされていたこともあった。

年配の人にとって何より懐かしいのは、札幌神社(現北海道神宮)のお祭りの掛小屋がこの川をまたいで建てられた事だろう。サーカスを始め見世物小屋が川をまたいで立ち、ジンタの音が響き、客引きの声がかき立てた。道は人波で埋まり、押し合いながら、見世物の看板を眺め、露店にむらかった。

不幸なことに昭和三十四年サーカス小屋から火が出た。観客の煙草のポイ捨てが原因らしいが、仮設のテントの火の回りは早く、逃げまどう観客から数十人のケガ人が出た。ライオンや虎が死に、逃げ出した象が一層パニックを大きくした。

この事件をきっかけに、創成河畔での小屋掛けは禁止になり、会場は中島公園に移ることになった。

そう。この事件を境にして市民の足は創成川から遠ざかった。それはまるで人波の消えた祭のあとのように。

その後は植えられた柳が生長し、川面におおいかぶさるようになった。緑は増えたが人はまだ戻ってこない。

札幌の略図の緑十字、その交点にテレビ塔と冒頭に書いたが、サーカスが盛んだった頃は川べりに消防署があり、東洋一高いと自慢の望楼があった。さらにその南、赤レンガ造りの交番が創成橋のたもとにあった。望楼は消え、交番は江別の開拓の村で余生を送っている。

創成橋は、この川に最初に架けられた橋、昔の形に再生されて今も健在だが、橋の両端にあったはずの札幌の東西の丁目の起点を示す軟石の小さな杭はあるべき場所から消え、地域の有志の人達の手によって、かたわらのビルに記念碑と一緒にさり気なく立っている。

創成川が過去のモニュメントのままであっていい筈はない。川をよみがえらせるには何よりも車と川との共生が必要だ。車道の連続地下化でも良いかもしれない。利便と環境の共生にもっと知恵をしばってよいと思う。